

細菌戦と現代

第2号 03.9.10



細菌のゐる風景

武田泰淳

(一)
私は従軍中、中国人の細菌患者を二回目撃した。二回とも集団的に收容された人々である。
第一回目は、異郷に上陸し、上海市まで行軍してまもなくであつた。塙土と化してまだ日
敵のたたぬ灰色の大きな空間に、人の逃げ去つた邸宅のはとりで見出した藪藪があさやかだつ
たのが、今でも目にのこつてゐる。それほど淋しげに死に絶えた如き風景であつた。中山醫院
の大きな近代風建築の壁のみが白々と清潔につつたが、その周囲の廣場には、陸揚げして來る
衛生材料や食料品の木箱が、次々と到着してゐた。附近の池にはまだ中國の娘の屍などがうか
び、泥にまみれた藍衣が風をまといひつけて、なかば水面に浮んでゐた。あたりは屍け跡の灰
の匂ひにみち、井戸の水ははげしい臭氣を持つてゐた。
ドライタヒとへだてた對岸の自然科学研究所の日本人職員がホナスで水を送つてくれた
が、日本兵の手がたを見るといきりたち、手をふりあげて罵倒する租界内の中國住民が、橋の附
近に密集した。そんなとき、それらの市民たちの日常の服装が、こちらの汚れてた服や身體に
くらへ、奇妙にきらびやかに見えた。向ふ側には明るく活氣のゑる都市生活が充滿し、こちら側

武田泰淳作「細菌のゐる風景」は、『改造文芸』昭和25年1月号に掲載された。熊谷信子氏の「「細菌のゐる風景」試論—武田泰の淳描いたディテールとしての細菌戦—」（『芸術至上主義文芸』25）という論文に、「ここで注目すべきことは、戦後まもないこの時期に日本軍が〈細菌戦〉にむけての準備をしていたということが、『細菌のゐる風景』に書かれていることに刮目しなければならない」と指摘されていたので読んでみた。

小説の主人公の私は、39年5月、南昌で野戦防疫部に配属されていた。その部隊長は「細菌戦の第一人者と自称」し、「中佐に進級できるかできないか今度の作戦で決定するはずなのに、報告すべき防疫部の成績のデエタがさっぱり集まらない」と苦惱していた。

そして、南昌から九江の防疫部に

9月30日(火) 731部隊細菌戦裁判 控訴審第2回 午後2時～3時

東京高裁101号法廷・・・→裁判の終了後 デモ

午後4時～6時 報告集会と学習会 弁護士会館1003CD号室 浙江省の原告から 弁護団から 学習会「浙贛作戦と細菌戦・毒ガス戦」講師 松野誠也氏(明治大学大学院生)

移動した。2階建の防疫部の事務所は「桃色やクリーム色の壁、中庭に面した廊下に白いてすりなどついた、九江ではめづらしい、新式な建物」。

出来たばかりの陣中日誌には、「上海戦線のコレラ流行の記録もあった。・・・私の最も興味をおぼえたのは有名なL山の山岳戦のさいの、細菌戦の記事であった。それは中国軍が日本兵をなやますため、コレラ菌を井戸に投入したと記されてあった。通過する日本兵がかならず使用した井戸の写真、その中から発見されたコレラ菌を培養したとおぼしきアンプルの写真もあった。ごく小さなガラス管のかけらをよく拾い出したとおどろかされた。だが私には何かその記載がそのまま信用しがたいものに想われた。細菌戦のもう一つの実例は、谷間の泉を使用したものであった。それはかなりの高度の溪谷の斜面にある青草の茂みにかくれた石で周囲をたたんだ泉であった。・・・その泉の写真には、その周囲に倒れ伏している中国の男女の姿が撮影されていた。・・・住民は明らかにコレラ顔貌をあらわしていた。」「敵ハアキラカニ、コレラ瀕死ノコレラ患者ヲ水中ニヒタシ、コレラ菌ヲ蔓延セシメ、以テ我ガ軍ガ下流ニ於テコノ水ヲ飲ミ、コレニ感染センコトヲ企図シタルモノトオモワル』 敵の謀略方針として、日誌にはさう記されてあった。」

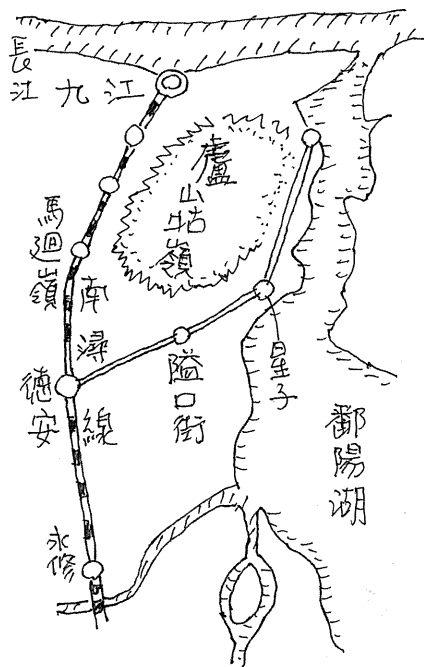
「私はこの記載のすべてがI部隊長のつくりごとだとまでは考えなかった。又、中国兵が同胞の患者をそのような目的に使用するなどとはどうも信じられなかった。只、私はたまたまイヤな気分であった。そこには、『軍には俺のほかにもう一人しか細菌戦の研究者はみないんだよ』『これからは飛行機で細菌を撒くよ。ロシアでも研究してゐるんだからな。』と、秘密らしく私にささやいたりするI部隊長の異常な執念、病的な競争意識、そして豪華麗美な大冊の日誌の制作をいそがすあの熱をおびて濁つた眼のくぼりが感ぜられた」。九江に来てからまもなく、「部隊長は中佐に進級した。」

武田は1937年（昭和12）10月、召集を受け、杭州湾上陸をやった柳川兵団の輜重補充兵として中支に派遣され事務系統の仕事をしていた。上海、杭州、南京、九江、南昌、武昌、漢口に從軍し、1939年（昭和14）10月、上等兵で除隊している。「合肥の野戦病院ではコレラ患者の手当を手伝ったこともあり、防疫部からの連絡や情報は入っていたものと思われる」と熊谷氏は推定している。

「軍隊と文学的出発点」と題する、武田泰淳と埴谷雄高との対談で、「埴谷；『廬州風景』ってのを書いているね。武田；あれは安徽省だから、・・・あの辺へいくと、非常に語りにくくなってくるんだけどね」と語っている。『廬州風景』では、コレラ患者で溢れる野戦病院の軍医や看護婦を描いている。

「支那事変ニ新設セラレタル防疫機関」には、南昌の第五防疫給水部（部隊長藤井英太郎軍医少佐）や安義の第六防疫給水部（部隊長泉一康軍医大尉）が1938年7月29日に東京の輜重兵第一聯隊で編成されている。（『医学者たちの組織犯罪』常石敬一著 朝日文庫）

「L山」が江西省の廬山とすれば、九江からバスで1時間の距離である。当時から有名



な別荘地帯であり、今は世界遺産である。

岡谷市蔵氏の「帰去来館始末記」（日本医事新報 NO.2033 昭 38.4.13）に、徳安（九江の南南西約 50 km）攻略中の 1938 年 10 月、コレラが流行したことが描かれている。

岡谷氏は、101 師団第一野戦病院に補充軍医として 1938 年 9 月下旬に着任した。「徳安の近くに病院を開設するために、前進を開始、温塘伝まで来ますと、・・・偶然にも、僅かの兵隊とここにやって来た同級の N 君に会い、・・・ここに来た用件を尋ねますと、近くの川を指して、『この川の上流の住民にコレラ患者が発生したので防疫措置に来た』と云う。・・・廬山附近の流れの水は日本内地のように綺麗なので、戦闘部隊の兵隊が喜んで炊事に使用したり、生水を飲んだり

したことも想像に難くありません。偶々、戦闘部隊から、コレラ患者が発生したことを聞いておりました。水源調査の結果、この川が汚染されていること、更に上流、即ち廬山々麓に戦禍を避けて隠れている住民中にコレラ患者が発見されたので、N 君は九江の防疫給水部に勤務されているのですが、この日命令にて防疫処置をするためここに出かけて来た由です。・・・私にも一緒に行かないかと誘う。私も待機中であり、不馴れの戦地で畏友に遇った喜びも手つだって、誘われるままに一緒に行くことにしました。山麓に向かって流れに沿いつつ暫く登るようにして行くと、竹柳等の植込が少しある一軒の家がありました。これだということで兵隊達とこの家を焼払う目的で火をつけ、もくもくでるの見届けて帰って来ました。コレラ防疫に家を焼払うというのも変ですが、・・・」という。後に、この家は陶淵明の記念館であることがわかる。「N 君はその後、硫黄島で戦死された。」

岡谷氏と同じ 101 師団の軍医であった、岡村俊彦氏の『槽火』（文献社）には、九江から馬廻嶺を経て、徳安をめざした 106 師団の兵は、「いきている兵隊だけ第 101 師団、佐枝支隊が血路を開いてつれて来たが、小便をそのままたれ流しの兵が多くて臭くていけない、臭いのは 106 師団の兵隊だとすぐわかる。合掌街の野戦予備病院の患者に現在 1500 名これ以上は収容出来ずとここも兵站病院と同じ参上を呈している様だ。下痢患者が飯盒をかかえたまま便所で座り込んでいる姿は哀れである。」書かれているが、病名は解らない。

同 101 師団第一野戦予備病院の軍医であった住吉嘉雄氏の『鄱陽湖は青かった』（文献社）には、コレラらしきものは出てこない。

以上、細菌戦の事実関係はよく分からないが、武田が「細菌戦」というものを知っていたのは確かである。

1940年農安・新京のペスト流行の謎（下）

<農安は731部隊の謀略>

大塚文郎医事課長の『大塚備忘録』第一巻の11月1日「ホ号報告要領（石井少将）」という記述の中に、「既往実績 農安県 田中技師以下6名」とある。—⑫—

1940年の農安のペスト流行は、「ペスト常在地帯」に先に流行したのではなく、1940年の初めての流行である。外からの伝播ではない。農安やその周辺でのペスト流行を詳しく分析して、農安県城とその附近は、本来ペストの病巣地ではなく、「既往実績」とは田中英雄技師（田中班班長 昆虫研究）による1940年のことであり、「細菌謀略」であることが明らかにされている。 —⑬—

<新京「三不管」でペスト?>

新京に「三不管」と呼ばれた地域があった。ロシアの東支鉄道寛城子付属地と満鉄の付属地の間に挟まれた地域で、日本・ロシア・中国がたがいに侵してはならない緩衝地帯であった。地名もこの意味が込められていた。限られた狭い地域に、700戸、5000人の細民が密集して住んでいた。「満州国」成立後も反満抗日分子のかくれ場所になったり、阿片秘密取引の場所となり、関東軍には好ましがらざる所となっていた。

1940年真夏、ここに、ペストが発生したという。「そのペストは、たいして猖獗はしなかった。数人の発生にとどまった。」「雪崩こむように、闖入してきた、白衣の防疫隊による患者の隔離、強制検診、予防注射、各戸毎の消毒等々、窟はまさしく、蜂の巣をつつく騒ぎとなり、」「これを機会に三不管は、徹底防疫の名で、関東軍工兵隊の手で爆破し、焼払われることになり、五千余の住民たちは、二キロほど奥まった、宋家窪子なる村落に急造された、集合長屋に移転させられ、・・・三不管地域は、まんまんと関東軍の基地拡張に、接收されてしまった。」という。 —⑭—

しかし、三不管住民のペスト患者の報告はない。「市防疫隊隊員によれば、三不管地区では真性ペストは発見されたことがなく、かろうじて道端に倒れている中国人の死体を疑似ペストと診断して防疫をおこなったそうだ」ということだろう。 —⑮—

いかに傲慢な石井部隊長といえども、首都の新京に直接、細菌散布実験を行うことは考え難い。

<高橋正彦論文の意味>

高橋論文は、農安・新京ペストについての、「疫学、臨床、細菌学を網羅した詳細な研究成果の報告」であり、「一 ペスト流行の疫学的観察—農安」、「二 ペスト流行の疫学的観察—新京」、「流行の臨床的観察」附「ペスト血清殺菌反応について」、「流行における菌検

索成績」、「流行において分離せるペスト菌について」、「流行における防疫実施の概況」の各編に分かれている。

「ペスト菌の検出は患者材料からは勿論のこと、死者の解剖に当たって、腺ペスト、肺ペスト等の疾患別、各臓器別・部位別に材料が採取され、鏡検および培養による菌検索が実施されている。また、流行地域で捕獲されたネズミおよびノミからもペスト菌が分離されている。」「さらに、患者および死体から分離されたペスト菌71株、流行地のネズミから分離された29株、流行地のノミから分離されたペスト菌9株、シラミからのペスト菌1株、対照として研究室で保存されているペスト菌毒性株2株（No.1およびNo.105）について菌の性状を比較検討している。その結果1940年の農安および新京におけるペスト流行からの分離株はすべての性状が一致すること、しかも731部隊での保存株とも同一であることが判明している。」 —⑩—

対照として、731部隊の保有株を使ったのは、本来の実験方法の対照としたのではなく、農安・新京のペスト菌株が731部隊の保有する菌株と同じかどうかを確かめることが目的だったのだろう。

それが見事に一致した。

400名を越える犠牲者の上に、農安での「実験」は成功し、想定していた周囲への伝播、しかも新京という大都市に伝播した。そしてデータもしっかり得られた。石井部隊長は、確信を持って、1940年の衢州、寧波、金華への細菌戦の実験に臨んだのだろう。

⑫「日本軍の細菌戦」吉見義明 伊香俊哉 『季刊 戦争責任研究』No.2 93年冬季号

⑬「新京ペスト謀略—1940—」 『戦争と疫病』 松村高夫他 本の友社

⑭『細菌戦軍事裁判』 山田清三郎 東邦出版

⑮「鈴木元之自筆供述書」 『細菌作戦』 同文館

⑯「中国で発生したペスト流行と日本軍による細菌戦との因果関係」 中村明子

『裁かれる細菌戦 No.3』 721・細菌戦裁判キャンペーン委員会

5月20日（火）、細菌戦裁判東京高裁第1回公判が開かれ、王選原告団代表、常德から原告2人や被害者遺族を含め多数の方々が来日しました。裁判終了後デモ、衆議院議員会館で政府との意見交換会を行いました。厚生省と防衛庁は出席しましたが、外務省は出席を拒否しました。21日は衆議院議員会館で国会議員との交流会、夜は池袋で歓迎会を行いました。



21日議員会館の王選さんと何英珍さん

“アメリカ軍、朝鮮戦争時、無等山（韓国・光州市）で細菌戦”

当時のパルチザン活動のチョン・ウニョン氏が情報提供・・・全民特委、現場調査
“1951年、パルチザン討伐の名目で、白い噴霧液をばら撒き、ファスン郡イソ面の住民等、200名から300余名が皆殺し”

朝鮮戦争当時、アメリカ軍が、航空機を使用し、細菌と思われる未確認物質を、大量に散布し、一つの村の住民が、ほとんど皆殺しにされたという衝撃的な主張が提起され、真相調査が求められている。

アメリカ軍の虐殺蛮行の真相究明の全民族特別調査委員会（全民特委）、光州・全南調査団（団長 イ・シン氏）は、朝鮮戦争当時、無等山地域で、パルチザンとして活動していたチョン・ウニョン氏（74歳・光州市西区ファジョン洞在住）が、アメリカ軍が細菌弾をばら撒いたという情報提供をして来たことにより6月8日、チョン氏と現場であるファスン郡イソ面ヨンピョン里（当時トンドン村）一帯の調査を開始した。

チョン氏は、「1951年初秋頃、パルチザン討伐の名目で、無等山一帯に複葉機という軽飛行機から白い噴霧液をばら撒かれ、その3日後、その場所で、住民たちとパルチザン等が、全身に熱が出て、真っ黒になる回帰にかかった」と明かした。

彼は、これにより、村にいた住民とパルチザン等100余名が死に、伝染性の強い回帰熱にかかった人々が、近隣のペガ山に移動、二次感染者を含む200から300余名が、死んだものと見られるとし、「これは、当時、アメリカ軍により細菌が供給されたために、アメリカ軍が、韓国にも細菌戦を強行した証拠」と主張した。

チョン氏によれば、この村の場合、当時15から17世帯が生活していたが、現在は家のあった跡が残っているだけで、完全に廃墟になった。北朝鮮は、アメリカ軍が、1952年1月から3月まで、北朝鮮地域400余カ所に700回以上、細菌弾を投下、この細菌弾に入っていたハエ、蚊、クモ、南京虫、甲虫等が、コレラ、ペスト、チフス等各種の伝染病を広めたという主張を、去る98年提起したが、韓国でも、細菌戦により、罪のない人々が虐殺されていたという主張が、出たのは今回が初めてだ。

イ・シン団長は、「チョン氏の主張はかなり信憑性があり、これを基にアメリカ軍が細菌戦を強行した具体的な物証資料を収集、去る6月23日、「アメリカのニューヨークで開かれる『コリア国際戦犯法廷』に提出予定だ」と明らかにした。アメリカ軍の細菌戦敢行の事実を初めて提起した論文を発表した東国大学カン・ギョン・グ教授（社会学）は、「アメリカ軍の韓国国内での細菌戦の話は、噂で広まっただけで具体的な情報提供と証言が出たことは無いとし、今まで学



アメリカ軍が投下した細菌弾について説明するチョン・ウニョン氏（右端）

会に報告された細菌戦は、北朝鮮に限定されていた」と語った。しかし、アメリカ軍と国連軍司令部側は、朝鮮戦争時、生物化学戦や細菌戦などに関する資料を探すことはできないとし、事実ではないと主張しており、論難が起きている。（キム・ヨン・ウック記者） 一翻訳・増田一

戦争遺跡

埼玉県比企郡小川町前高谷（まえこうや）の第一航空軍地下司令部予定地跡。一部を朝鮮人労働者が掘削。



10月1日 (水) 10:00～12:00 政府交渉・意見交換会

衆議院第2議員会館第1会議室
13:30～ 院内集会 衆議院第1議員会館第2会議室
入り口で入場票を配布します。何方でも参加できます。
夜 歓迎会 飯田橋にて 参加の方は一瀬法律事務所までご連絡を
(03-3501-5558)

10月2日 (木) 午後6:30～9:00

＝細菌戦裁判の原告・遺族を囲む交流学習会＝

場所 中野ゼロ 西館 学習室B JR中野駅から歩き7分

入場料 500円

1940年・1942年細菌戦の被害地の浙江省から多数の原告や遺族が出席します。
裁判の傍聴に来れない方は、ぜひこちらに御参加下さい。

「細菌戦と現代」購読のお願い

細菌戦裁判、731部隊、細菌戦、現代の生物戦、本の紹介、資料の紹介、などを掲載します。

購読料 2000円 年5回発行

パネル貸し出し 「731部隊の細菌戦」

細菌戦の事実を知ってもらうために、パネルを作りました。内容は、731部隊とは、衢州細菌戦、寧波細菌戦、常德細菌戦、浙贛作戦細菌戦、恐ろしい伝播、裁かれる細菌戦の7項目です。細菌戦裁判支援のために、各地で、パネル展示会を開いてください。

ラミネート加工 A2 70枚 A3 2枚

貸し出し料 7日間 1万円 送料 実費 宅急便で送れます。

カンパをお願いします。増大する事務経費補助のためによりしくお願いします。

〒336-0015 さいたま市南区太田窪5-18-15 林荘2階 奈須方

731・細菌戦裁判キャンペーン委員会 TEL・FAX 048・882・4707

郵便振替口座 00110-4-86543 731・細菌戦裁判キャンペーン委員会